

萩原朔太郎の世界

首藤 静夫

当会のKさんのエッセイで「室生犀星・萩原朔太郎の交友」企画展を知った。彼らが一時住んでいた田端の街、その駅近くの田端文士村記念館で開催中とのこと、早速でかけた。

企画展は二人の交友を中心に、さらに芥川竜之介との交際などを大パネルで紹介、Kさんが記す通りなかなかの味わいであった。

この中、萩原朔太郎は口語体による自由詩を確立し、叙情詩の頂点とされる詩人である。ところが同じ詩歌でも例えば俳句の子規や虚子、短歌の左千夫や茂吉ほどには人口に膾炙されていないようだ。

理由の一つは、万葉の昔から続く七五調（五七調）が明治以降も愛され続けていることにある。俳句・短歌だけでなく、藤村の「小諸なる古城のほとり……」、晩翠の「春高樓の花の宴……」を始め、その後の詩、童謡、唱歌、軍歌、演歌、標語まで、多くは七五調がベースである。しかも文語表現で調べをすっきり整えている。詩を美しく謳い上げることに主眼があり覚えやすい。近代人の内面の心理や懊悩を見つめ掘り下げることは二の次にされた。

朔太郎はこれに対し、口語で謳い、七五調に囚われない自由律で独自の世界を切り拓いた。彼の謳うものは自分自身の苦悩やさびしさであり、忍びよる狂気であった。代表詩集の「月に吠える」「青猫」から晩年の「氷島」に至るまで、その姿勢は変わらない。初期の「夜汽車」「旅上」のような瑞々しい作品を別にとすると、一貫して重苦しさの中に不思議な韻律の世界が現れる。また複数の視点から構成され、立体派の絵画をみるようでもある。それまでの感傷的な気分の叙情詩とは異なる世界である。

このような厳しい詩の世界を嫌ってか、詩人の多くは散文の世界に移っていった。朔太郎を頂点にその後の詩壇は下り坂となる。叙情詩で気を吐いたのは三好達治、伊東静雄くらいか。時代は軍国詩とそれに対抗する労働詩に傾斜する。叙情詩の世界がもどるのは大岡信、谷川俊太郎らの登場を待たねばならない。